

この前、理科の研究授業が行われた。パターンCによるものである。同じ授業を違うクラスでも行うため、1回目の反省を生かした2回目の方がよくなるケースが多い。理科のN先生は、1回目のクラスでの反省をもとに、いくつかの改善を加えて2回目のクラスの授業に臨んだ。私のように1回目も2回目も参観している者にとっては、その違いは明らかだった。

授業の終末を迎えた。N先生は、この時間の目標に直結する一番大切なポイントで、一人の生徒を指名し、前に出して説明をさせた。S君だった。S君は、ホワイトボードの上でマグネットパーツを動かしながら、一生懸命説明を始めた。この説明は簡単ではない。

すると、すぐ近くにいる生徒が助け船を出した。S君は、わかってはいるのだが、思うように説明ができないでいた。こういったことはよくある。理解できているかどうかの最高レベルが説明できるということである。

S君は、何とか最後まで説明を終えた。自然と拍手が湧き起こった。生徒が発表したあとに、先生が「はい、拍手」と促すことがあるが、そういった拍手ではない。心からの拍手だった。授業が終わった。S君と助け船を出した生徒が、さらに先ほどの説明について話をしている。理科の話をしている。実にいい光景だった。授業が終わったあとも、まだ授業の話をしているのである。そこには学びがあった。授業者冥利に尽きるではないか。

次の日の朝、S君が友達と登校してきた。呼び止めた。「S君、おはよう。昨日の理科の授業はよかったぞ。大したもんだ。がんばれよ。期待しているぞ」S君は、「よっしゃー！」と小さくガッツポーズをしていた。隣の友達もうれしそうだった。スポーツでなくても、授業でもガッツポーズはできる。

N先生は、ベテランの先生である。1回目のときも2回目のときも、放課後、校長室に来て「校長先生、今日はありがとうございました」とあいさつに来てくださった。2回目のときは、前述のようにS君の話をした。N先生は、「S君は理科好きなんです」とうれしそうだった。

あの理科の授業に主人公がいるとしたらS君だろう。S君がむずかしい内容をみんなの前で説明できたのは、理科好きという土台の上に、N先生が改善を図った2回目の授業があったからだろう。他にも、N先生と生徒たちとの関係性がよいということもある。授業の雰囲気が良い。大事なことである。

以前、この校長室だよりに「主人公」というタイトルの号を載せたことがある。まさに、N先生の理科の授業には、S君という主人公がいた。また次の授業では、違う生徒が主人公となるかもしれない。他の教科の授業でも、いろいろな生徒が主人公となれば、きっと中学校は、今よりも生徒にとって魅力的なところとなるのではないだろうか。理科の授業でのS君の姿から、そんなことを考えさせられた。